

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 28 年 2 月 10 日	
所属部局・職	野生動物研究センター 修士 2 年
氏名	大谷ミア

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本モンキーセンター(以下 JMC)
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
動物園・博物館実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 28 年 2 月 6 日 ~ 平成 28 年 2 月 9 日 (4 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
JMC キュレーター新宅氏、 野生動物研究センター 伊谷教授
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果 : 長さ自由)
写真(必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

日程

- 2/6 園長レクチャー・園内見学
- 2/7 解剖見学・博物館教育
- 2/8 獣医見学・エンリッチメント
- 2/9 標本実習・京都造形大ワークショップ

初日はまず、伊谷園長による JMC の歴史と現在の園内状況のレクチャーであった。JMC が世界最多種類のサル類を展示する日本国内唯一の登録博物館であり、日本の霊長類学とともに歩んできた貴重な場所であるということを知った。同時に展示状況が好ましくない例として動物を横並びに展示するモンキーアパートや、地面が不自然なコンクリートでできているヒヒの展示室などがあげられており、レクチャー後の園内見学でそれらを確認することができた。モンキーアパートに関しては動物を見るという点では比較などがしやすく有効な展示方法ではあるものの、やはり動物福祉などの点から考えると改善が必要であると思う。ヒヒの展示室に関してはやはりあまりにも不自然な状況で、コンクリートの山の上にジャングルジムがあるのみだった。チンパンジーの展示箇所のように少しでも野生の植生に似せた展示ができればより動物のためになると思う。一方で JMC では動物福祉・来園者満足度をともに考慮した工夫もなされていた。例えば水に入らないリスザルの性質を活かした島では、人がリスザルと檻を隔てずに歩き回ることができる。ワオキツネザルのワオランドでも同様だ。テナガザルのブラキエーションを誘引するための構造物も、頭上を渡るサルをみられる貴重なものである。このように動物の野生に近い動きを誘引することは動物のためになり、同時に来園者にも楽しんでもらえる。いかにこれを低コストで、園の負担にならずに行えるかということがミソになると思う。

2 日目はニホンザルの解剖見学から始まった。JMC では死因特定のためと、標本作成のために園内で亡くなったすべての個体を解剖している。標本の収集が活動の核心となる博物館として、非常に大切なプロセスである。私自身解剖は生きたカエルで一度行った経験があり、動物の体の構造を生で見ることの衝撃と感動を覚えている。今回はよりヒトに近いニホンザルであることからとても楽しみにしていたが、驚いたことに見たいと思う意志に反して、体が立っていらなくなった。こうした経験は初めてだった。最後に内臓を確認し、過去に教科書で学んだような体の構造を生でみることができ、大変貴重な経験となった。今回は内臓をホルマリン漬けにする段階までを見学することができたが、場合によっては剥製、毛皮、骨、内臓、脳の標本や胎児の場合はそのまま標本にする。こうした解剖や標本作りの積み重ねが、いかに貴重であるかを知った。2 日目の午後は博物館教育に関するレクチャーに加え、実際に来園者調査を行った。来園者や学校に対して教育を行うことも博物館にとっては欠かせない役割であり、そのために JMC ではキュレーターという役職がある。主な教育の場は JMC での一般向けの公演、小中高等学校での出張授業、それぞれ利き手の集団に合わせた言葉遣いと内容を考えなければならぬ。日本の動物園・水族館での問題として、教育の場としての認識が低いという点が挙げられる。せっかく生きた動物(時には標本)を目前にすることができる貴重な場所であるにもかかわらず、レクリエーションの場のみになってしまうのは非常に悲しいことだと思う。今後研究者などがそうした役職につくことが増え、日本の動物園等が教育の場として改善していくことを願う。

3 日目の午前中は獣医見学であった。KIDSZOO(小動物)のエリアでウサギやモルモットの往診を行い、病院に戻って薬を作成する。薬品はヒト用のものを使用し、獣医が用途に合わせて調合する。時には薬の調合だけで数時間かかることもあるらしい。この日は 30 分程度で終了し、次はニホンザルの脚の抜糸を行った。動物への負担を軽減するため、気体の麻酔を用いていた。状況によって麻酔の濃度も調節でき、野生でも応用ができれば非常に便利だと思った。その次はワオキツネザルの足裏の怪我の治療を行った。エリザベスカラーがつけられており、セルフグルーミングができないことから、麻酔がかかっている間に飼育担当の方が代わりに体を拭いていた。動物のためにできることは何でも行っている印象を受け、そのケアの温厚さに感心した。3 日目の午後は飼育作業とエンリッチメントを行った。まずはチンパンジーの給餌を行い、果物を室内の枯れ枝に刺したり、麻袋にくるんだりし、少しでも採餌時間が伸びよう工夫されていた。その後少し観察を行ったが、普段とは違ったヒトが室内にいたため非常に興奮し、ほとんどの果物が一斉にばら撒かれることになった。採餌時間の伸びとしてはさほど効果がなかったかもしれないが、いつもと違うということが動物には何らかの刺激になったと思う。最後にマンドリルとチンパンジーの採食エンリッチメントのため、木に穴をあけ蒸したサツマイモをつめた。マンドリルは今までも行っていたが、チンパンジーにこのエンリッチメントを行うのは初めてだったようだ。実際にあげてみて、観察を行ったが 20 程度たっても全く気づく様子が出なかった。最後にコドモが棒に気がつき、指でサツマイモをほじくって食べていた。特に父親のディスプレイから逃げてばかりであり採餌に時間を取れていなさそうだったので、親が食べ終わったところに親が気づかないサツマイモを一人で食べているコドモの姿はとても微笑ましかった。

最終日は標本実習を行い、骨の標本を作成した。すべての骨を頭骨、胸部、脊椎と尾、両腕両脚、手足に分け、それぞれ小袋に入れる。箱に番号を書いて完成だ。JMC にはこのような骨標本が数千ある。すぐに使用する物ではないが、標本を用いた研究や教育など、それが役立つときはいつかすると信じて作り続けることが大切である。またその中の一つを仕分けことができ、とても光栄である。こうした標本は今後も数多く作成されると考えられるが、実はその保管場所がほとんど残っていない。今後の課題として、場所の確保と、耐震対策などが挙げられると思う。標本は実際の動物から得られる物ばかりではなく、歴史的な価値をもつ、絵画や置物などの歴史標本がある。歴史標本は個人から寄付されることが多いということを知った。午後は京都造形大学の方々がワークショップを開いており、休憩所のペンキ塗りやピザ釜作りを行っていたので参加した。休憩所の壁紙を剥がすこ

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

とが主な仕事となり、残念ながらディスカッションには参加できなかったが動物園の仕事にはいかに様々な業務が含まれているかということを実感した。

全体を通し、JMCにおける多数の職業の一面が見ることができた。来園者として動物園・博物館に行くと殆ど動物を見るだけで帰ってしまうので、バックヤードを見ることができ、また自分で作業ができたのは非常に貴重な経験であった。そのなかでもいかにJMCが博物館として資料収集や教育活動に力を入れているかということを知り、日本国内の他園でも今後同様の努力が出来る環境が整うことを望む。



抜糸の様子



芋を詰めた棒から食べるチンパンジー



部位ごとに仕分けたヨザルの骨標本

6. その他 (特記事項など)

本実習を行うにあたってPWS・JMCの皆様にご多大のお世話になりました。感謝申し上げます。